虚構の家

曽野綾子

読売新聞社

虚構の家　八五〇円

著　者　曽野綾子
発行者　松田延夫
発行所　読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇
大阪市北区野崎町七七　〒五三〇
北九州市小倉北区明和町一の一一　〒八〇二

印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　協和製本株式会社
第一刷　昭和四十九年四月五日
第三十刷　昭和四十九年八月三十一日
©曽野綾子　昭和四十九年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0093-701510-8715　Printed in Japan

目

次

第一章　重い手応え……7
第二章　家政婦……37
第三章　膠着……67
第四章　一家団欒……105
第五章　隠れ家……142

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第六章　幼い母……171
第七章　胸の中の石……193
第八章　霧の夜……222

装丁　栃折久美子

虚構の家

長編小説

第一章　重い手応え

1

日和崎くに子は、月曜日の朝、夫の省三を六時四十五分に、玄関まで見送った。

「今日は、午後、夏の学校のＰＴＡがありますから」

と彼女は夫に言った。日和崎家は一男一女の子持ちで、夏というのは小学校六年生になる妹娘の名であった。

「じゃあ、塚本を昼頃までにいったん帰そうか。車、あった方がいいだろう」

塚本、というのは、運転手の名前であった。

「よろしいんですか？　車、使わせて頂いて……」

くに子はちょっと遠慮して見せた。

「今日は構わんよ。どっちみち、昼食後はずっと来客で外へ出られないんだから」

「それでしたら、廻して下さい」

「じゃ、行って来る」

くに子は夫に傘をさしかけて門まで出た。黒いベンツで待機していた運転手の塚本が、慌ててドアを開けるために駆けて来る。くに子は運転手にも、

「塚本さん、ごくろうさま」

と丁寧に声をかけた。

「行っていらっしゃい」

傘は自分がつぼめて持った。日和崎は家を出ればもう、車の乗り降りに雨がかかるような所へは行かないのである。仕事や交際の先は、殆んどがビルの中だから、車で乗りつければ、傘やレインコートは不用なのであった。

くに子はそれから家の中に戻り、まだ誰も起きている気配のない家の、食堂の鎧戸だけを開けた。朝陽のさし込む側に、食堂は面している筈だったが、今日は、どんよりとして雨もよいの空が力なく見えるだけである。

鎧戸を開けて、窓を元通り閉めなおしてから、くに子

は飾り棚兼用の食器戸棚の方に近寄って行った。棚の中にはチェコのグラスの類が、しっとりと輝いている。くに子はしかし、グラスに用事があったのではない。棚の脇の部分にとりつけてあるドイツ製の温度計を見たのだった。

十三・五度である。くに子は反射的に窓の方に歩いて行き、温風式の暖房のスイッチを押した。夫の省三は、ホテルの社長で、いつもホテルで暮しているから、室温が常時摂氏二十三度に保たれているのが好きである。子供は、中学二年の基と小学校六年生の夏と二人だけだが、夏も体がひどく弱い。

くに子がそんなことをしているうちに、それでも、住み込みの若い手伝いのサツキが眠そうな眼で起きて来て、テーブルの上に食器を並べ始めた。香港製の刺繍をした青磁色のリネンのランチョン・マットに、イギリスのボーン・チャイナの紅茶セットと皿やスプーンなどを並べる。ナプキンは、それぞれの名前の頭文字をM(基)、N(夏)、K(くに子)という具合に彫り込んだ銀のナプキン・リングにさしてあるのを置いた。

くに子は、朝食の席に、夫がいないことを不満に思ったことは一度もなかった。子供たちが小さい頃は、殆んど毎日いなかったものである。六時四十五分というような早朝から家を出て行く夫は、決してゴルフになど行って遊んでいるのではない。

日和崎省三はホテル・バレス・ビューの社長である。彼は毎日朝食をホテルで食べるのであった。それがホテル屋の一種の勤めである。ホテルというものは、いわば二十四時間、年中無休の商売である。経営者はそれと共に、常に現場にあらねばならぬ、と省三は言うのである。

子供たちへの教育上の必要もあるというので、省三は目下のところ、週に二回は家で朝食をとることにしている。木曜日と日曜日である。しかしそれ以外の日には、彼は七時半には、ホテル・バレス・ビューの主食堂の一番端の、一目で食堂全体が見渡せる席に着いて一人で朝食をとるのである。バレス・ビューの主食堂は、名前が示す通り、皇居のお堀がよく見える。石垣が歳月と歴史を、がっしりと受けとめている。

しかし日和崎省三はそんなものを眺めてはいない。彼はまず、自分の前に並べられたグラス類や、ナイフ、フ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ォーク、皿などをさりげなく点検する。省三はごく普通の客たちと同じ朝飯を食べるのである。グレープ・フルーツの半切り、オートミール、ベーコンとスクランブルド・エッグス、トーストかイングリッシュ・マッフィン、それにコーヒーである。グレープ・フルーツが乾きかけていないか、トーストの焼き加減は適当か、彼は実際に見ているのである。

食べながら、彼は客たちの様子も見ていた。客の中には、大きなモンステラの鉢植を背にして坐った彼に気がついて、わざわざ挨拶に来るのもいる。外国人には、ことにそういう人懐っこい常連の客が多い。

しかしその間にも、省三の眼は、食堂の中にまんべんなく注がれている。かつて、彼のこの役目は父の省吾がやったのであった。父は西洋式ホテル屋の癖に、一種の国粋主義者で、夕食は必らず、羽織、袴をつけて、食堂のこの席に坐った。その父が、省三に言ったのである。

≪古くさい経営者と言われるようになろうが、食堂にだけは毎日出ることだな≫

省三は父の遺言を半ば守っているのであった。もっとも、父のように、日曜日にも出社するという気にはならない。木曜日も子供と朝飯を食べるために、支配人が、彼に代って、七時半から（つまり朝食を監督するために）ホテルにいることになっている。

≪あそこにいるボーイは何という名だね≫

省三は、気にかかることがあると、どんな遠くにいる従業員のことでもきちんと食堂の主任を呼んで確認するのだった。

≪はい、平沼と申しますが≫

≪今、お客がジュースを飲んでいる前を横切るようにして、コーヒーを注いだよ。あれはいかんね≫

≪はい、どうも申しわけありません≫

給仕は必らず、食事をする人の左側からサービスをすることになっている。ということは、ウエイターは一人の客に給仕したら、次の客のためには必らず、位置を一人分動いて、常に客の左側に立つようにしなければならない。しかし、若いボーイたちの中には、それが面倒くさいので、一カ所に立ったまま、二、三人のコーヒーを注ごうとする横着者もでて来る。するとこの場合、給仕人の腕が、食べている客の前を横切るということになってしまう。

給仕(クエイター)の作法上のことばかりではなかった。ウエイトレスの髪の手入れの悪い者、私語、ことに客の噂話など、省三は厳重に禁止する。有名な俳優が来合わせた時、給仕の中に、サインをねだった者がいた。ホテル関係者は食堂のボーイであろうが、客室係のメードであろうが、サインを頼んだりしてはいけない。それは有名人を少なくともホテルではそっとしておいて、ゆっくり休んでもらうために必要な礼儀なのである。

省三は、四十四歳にしては、昔かたぎで、旧弊だと思われていた。そんなにきつく訓練したら、従業員が居つかなくなるでしょう、というような言葉を、現場の主任からも受けたことがあるし、同業者からも聞いたことがある。

ところが省三に言わせると反対なのだ。若い者は怠けたがってもいるが、一方で厳しく訓練されたがってもいる。学校で運動のクラブなどに入り、しごかれるのを好むのは、その証拠である。青年たちは、信念を持った有能な指導者を渇望(かつぼう)しているのだ。今の大人たちは、あまりに腰くだけばかりだからだ。そして又、若者たち自身だとて、誇はほしいのだ。それは、同じ職場の他の連中と、自分は全く違う厳しさに耐え、ずっと深い何ものかを得ているということ。その重い手応えという奴が、若者たちといえども好きなのである。大きな声では言えないが、一応の厳しい躾(しつ)けに耐えられないのは知能も気力も劣った連中ばかりである。そういう従業員は、早くやめて行ってくれた方がいい。そして本当の将来性のあるのだけが残って、ホテル・パレス・ビューという品格のあるホテルとしての気風を伝えて行けばいいのだ。

省三はホテルを決して大きくしなかった。ホテル業は、新館を建てだす頃から、多くの場合自己崩壊(ほうかい)に陥る。心臓はもとのままなので、容量を大きくすると総身に血がまわりかねるという状態が出てくるのだ。やむなく機械化をせい一ぱいとり入れるが、それは人工血液を輸血するようなものである。一応、体は動きはするが、何となく血色は悪く、客たちは薄溶きになったサービス、まずくなった食事に魅力を失う。そして、昔ながらの規模で、こぢんまりと、味わいも濃厚に、本当に通(つう)の客のためだけに存在しているパレス・ビューのようなホテルに改めて心惹(ひ)かれるようになる。ワシントンにも、パリにも、ロンドンにも、どこにも、こういった本当に

通のための常宿というものはあるのである。
くに子は省三の性格や商売の方法を知っていたから、朝食にさえ居合わさぬ夫を怨んだことなど一度もなかった。むしろくに子は、子供たちが食事に下りて来るのを父親と二人分待つ気持で、早々と紅茶をいれにかかった。

2

先に下りて来たのは、中学二年生の基であった。
「おはよう、基ちゃん」
くに子は言った。
「卵はいくつ焼いてもらう？　二つ？」
中学生だから、食べるのが当然、という期待で、くに子は息子に尋ねた。答えがないのでくに子はふり返った。
息子は、ハンケチで鼻をおさえて、後ずさりするように食堂を出て行くところだった。
「どうしたの？　基ちゃん」
何か有毒なガスでも、食堂に立ちこめているという様子の息子に驚いて、くに子は尋ねた。
「臭いよ」
「臭い？　何が？」
「食堂に、脱臭剤を撒かなかったろう？」
それだけ言うと、基は逃げるように出て行ってしまった。
部屋に脱臭剤を噴霧状にして撒くというのは、どこのホテルでも掃除の時にやっていることであった。西洋人には腋臭の強いのもいるので、こういう薬も習慣も発達したのであろう。
くに子はこれはいいやり方だと考えて、十年ほど前から、自分の家のあちこちにも、この脱臭剤の噴霧器を備えつけるようになった。それはアメリカ製の薬で、成分は、フェニールフェノール、N・アルキル、N・エチール、モルフォリニウム・エチールサルフェイト、アルコールなどで、室内に二、三秒吹きかけるだけであらゆる隅々まで浸透して、バクテリヤによる臭気を殺す、ということになっている。他の脱臭剤のように、甘ったるい香料がそえてあるということはないが、微かな爽かな匂いが残る。

くに子は初め、食堂内で、匂いの強い料理を出した時だけ、その匂いがこもるのを恐れて、この脱臭剤を使ったのであった。ガーリック・トースト、すき焼き、ジンギスカン鍋など、ほっておくと臭気がそのまま翌日まで持ちこされるような料理も時々ある。

しかし、まだほんの小さい子供だった基は、この匂いをひどく好んだ。自分でも撒いて歩いた。≪殺菌作用は七日間保ちます≫という意味の英語が書いてあるのよ、とくに子が説明したのが気にいって、これさえ撒けば、あらゆる菌が死滅するのが見えるような気がするらしかった。

昨夜の料理は何だったろう。くに子は思い出そうとしながら脱臭剤の噴霧器を探した。昨夜は家鴨とオレンジを煮た。つけ合わせは、芽キャベツとフレンチ・ヌード（フランス風そば）である。それにシーザー・サラダであった。家鴨にも、サラダのドレッシングにも匂いがないわけではないが、とくに基の嫌いなものではない。

基の潔癖にも困ったものだ、と思いながら、くに子は薬を吹きかけると、

「基ちゃん、薬撒いたわよ！　いらっしゃい」

と呼んだ。

兄より早く、夏が顔を出した。ダーク・グリーンのミッション・スクールの制服を着ている。

「おはようございます」

細い手を、スカートの前できちんと揃えて母に朝の挨拶をした。長い髪はまだばらばらにとかしたままになっている。食後に、くに子がお下げに結ってやるのである。

「今日の個人面接、来る？」

彼女は母に尋ねた。

「行きますよ」

少女は自分の席に坐って兄の来るのを待っていた。省三が食事のマナーがやかましいのである。家族だけの時でも、皆が揃うまでは決して食べ始めるのを許さない。

兄が反対側の席に着くと、お手伝いのサツキが基の前に、二個分のオムレツと焼いたベーコン、夏の前には兎が卵を抱えているという恰好になっているエッグ・スタンドに、半熟卵をのせて運んで来た。

「佐々木さんがね、来月の十三日がお誕生日だから来て下さいって」

佐々木蓉子は夏の同級生である。
「そう？」
くに子は息子と娘の皿の前にトーストを一枚ずつ置いてやった。それから基が、まだナプキンをかけないでいるのを見ると、ナプキン・リングからナプキンを抜いて、
「さあ」
と渡してやった。
「十三日は日曜日なの？」
「土曜日なのよ。だけど学校からまっすぐ行っちゃいけないことになっているから、二時半に佐々木さんのおうちでお集りなの」
学校では誕生会に招ばれない子供への影響を考えて、学校からの直行はいけない。正式の食事はいけない。スナック程度、という申し渡しをしてある。
「夏ちゃん、お喋りばかりしていないでちゃんとお上りなさい」
この娘は小さい時から、どれほどすすめても食べない子だった、とくに子は思った。基の方はさっさとパンにバターを塗っているのに、夏は兎のエッグ・スタンドを眺めているだけで、卵の殻を割ろうともしないのである。
その時、基がふっと下を向いた。何か食べこぼしをしたようにも見えたが、彼は、
「サッちゃん」
とサツキを呼んだ。
「はい」
台所との境のフラッシュ・ドアを開けて、サツキが顔を出した。
「ナプキン落しちゃった。拾ってよ」
基は言った。
「はい」
サツキは言われた通り、テーブルの下に身をかがめたが、それが拾われる前に基は言った。
「それは洗って、別なの持って来て」
「はい」
ナプキンは今日新しいのを下ろしたというわけではなかったが、一週間も使い続けている、というのでもなかった。
サツキは言われた通りにリネンの戸棚の中から、別の洗いたてのナプキンを持って来た。日和崎家では省三の

趣味でナプキンはすべて専門の洗濯屋に出している。神神しいほど白く適当な堅さに糊のきいたナプキンを、サツキは基の膝の上に展げようとしたが、基の膝が開いていたのと、受け入れ態勢が、完全にできていないうちだったので、ナプキンは再び、はらりと床に落ちてしまった。

「それ、洗って、新しいの持って来て」

基は今度も素早く言った。サツキはちょっと情なさそうな顔をしたが言われた通りにした。夏がおもしろがって笑った。

「お兄ちゃまったら、二枚も落っことしたわよ」

「ひとのことに構ってるんじゃありません。早く、食事をお済ませなさい。マーマレードを食べる?」

くに子は娘に尋ねた。

「マーマレードはいや。ジャムがいいの」

「サッちゃん、ジャムを下さいね」

娘はサツキに向って《ありがとう》とジャムを受けとったが、すぐにそれを食べるでもなかった。

夏が食べないのと同じくらい、基も食事を食べるには長い時間がかかった。

「基ちゃん、早くなさいよ。学校遅れるわよ」

くに子が言っても、基は紅茶茶碗を空にしなかった。遂に基は、母のくに子の注いでくれる紅茶のティー・ポットから、次から次へと紅茶を七はいも飲んだ。

「お兄ちゃまったら、まだお茶飲んでる」

夏が笑った。

「だって飲みたいんだもの」

「お紅茶は体にいいのよ。利尿剤ですもの。ことに朝のお紅茶は体にいいのよ」

くに子は柔く満足して息子を見た。この細い体のどこに七はいものお茶が入るかと思うほどである。基は紅茶に決して砂糖をいれない。

夏が半熟卵の黄身だけを食べ終ると、やっと日和崎家の、父親のいない朝飯は終った。

3

日和崎くに子は、さすがに子供たちを一人一人玄関に見送るというようなことはしなかった。彼女は部屋に入って、朝の入浴をするために、浴槽にお湯をいれ始め

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com